



「省察力」と「協働力」

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻 専攻長 中野博之

2017年、雪解けの4月に産声をあげた弘前大学教職大学院も、来たる4月で設立から10年目を迎えます。今日まで、青森県教育委員会をはじめとする各地域の教育機関、そして青森県内各地の学校現場の皆様から賜りました多大なるご協力に、深く感謝申し上げます。

本学教職大学院ではこの9年間、「協働力」「省察力」「自律的發展力」「課題探究力」の4つの力の育成を柱に据えて教育研究活動を行ってまいりました。中でも私たちが特に重視しているのが「省察力」です。私は、省察とは「現在の自分の在り様（ありよう）と過去の自分の在り様をつなげ、未来の自分の在り方（ありかた）を考えること」であると捉えています。

先日、附属小学校で授業を行う機会を得ました。その後の協議会で、同僚の若松先生から「授業中に、授業者として若い頃は子どもの何を観ていたのか、そして今日は何を観ていたのか。何をきっかけとして視点が変わったのか（意識）」という質問を頂きました。その時私の脳裏には、かつては、「何人の子どもが挙手しているか」ということを気にかけていた自分の姿と、手を挙げていない子どもの表情の中に学びの萌芽を読み取ろうとしていた今日の自分の姿が浮かびました。その様な視点の変化は、授業中の発言が少なかった子どもの学びを追い、論文にまとめた経験を契機にしました。

若松先生の問いかけは、私の過去と現在の「在り様」をつなげて、「授業とは一人ひとりの学びを成立させることである」という、私がこれからも貫くべき教育者としての「在り方」を再確認させてくれたのです。こうしたことは、授業を行っている最中は無我夢中で気づくすべもなかったことはいまでもありません。

省察は、単なる反省ではありません。自分は何を大切にし、どのような教師になろうとしているのかを自らに問い、未来を拓く営みです。こうした思索は一人の閉じた思考からは生まれません。そのきっかけを与えてくれるのは、同僚や仲間への問いかけからです。つまり、省察を深めるためには、共に高め合う「協働力」が不可欠なのです。院生の皆さんには、仲間からの「どうしてあなたは？」という問いに真摯に向き合い、それを自らの未来の「在り方」を構想する糧としてほしいと願っています。



「教育実践研究発表会」を開催—対面・オンライン併用—

日時 令和8年2月16日(月)9:30~16:45

会場 弘前大学創立50周年記念会館及びオンライン会場

教職大学院では、在学中に3回、教育実践研究発表会を行います。ミドルリーダー養成コース（現職教員）の院生は、2年生になると現任校で勤務しながら実践と研究を重ねます。学校教育実践・教科領域実践コース（学部卒）の院生は、教科・領域等での指導を通して研究に取り組んでいます。多くの皆様に御参加いただき、御指導・御助言をいただければ幸いです。詳細については、当大学院のホームページをご覧ください。



2年次院生「最終報告会」研究テーマ

| ミドルリーダー養成コース | |
|------------------|--|
| 浅利 美穂 | 小学校特別支援学級におけるポジティブ行動支援の取組を通じた、児童の行動と意識の変容に関する実践的研究 |
| 遠藤 彩華 | 学校・家庭・地域がともに児童の育ちを支える体制づくり—児童にとって安心安全な居場所となる学校づくりの取り組み— |
| 高坂 洋輔 | 生徒の経験を違いを活かしたキャリア発達を促す授業づくりに向けた教師の「見取る力」の向上を図るための研修 |
| 三戸 大志 | 中学校外国語科における個別最適な学びを実現する授業設計の検討—方法を飼いならし、教科する授業づくりに向けたAI(愛)のある実践を通して— |
| 長嶺 海 | 学びの価値を実感する生徒を育む授業の在り方—高等学校における国語科と総合的な探究の時間の実践から— |
| 細田 瑛介 | 定時制高校における自己の課題と向き合う「総合的な探究の時間」—「対話」と「意識化」に着目して— |
| 山内 千秋 | 心理的安全性を高めるための学級集団づくり |
| 横濱 和也 | 自律的・継続的な校内研究のあり方—実践の省察と共有を通じた教師の学びの創出— |
| 学校教育実践・教科領域実践コース | |
| 加藤 広之 | 現実社会の中で知識と実践が融合する当事者意識を育てるために—高等学校商業科目に関する—考察— |
| 熊谷 翼 | 実習記録の省察から明らかにする教師としての自己効力感の向上—教職大学院生のセルフスタディ— |
| 佐藤 希泉 | 算数科における自己効力感を高めるための—考察— |
| 佐藤 恒太 | 高等学校における主体的に学習に取り組む態度を育成する地理教育—振り返り場面における「問い」に着目した授業実践— |
| 佐藤 謙 | 小学校社会科における主体的な学習者を育成する授業検討—自己調整学習の視点を取り入れた授業づくり— |
| 八木橋奈緒 | 一人一人が意欲をもち参加できる歌唱指導のありかた |
| 山上 昭恩 | 音楽の療法的効果を用いた教育的アプローチ—「ハートタイム」の実践を通して— |
| 山谷 峻右 | 中学校理科における学習意欲を高める方策の検討—期待と価値に着目して— |

| | |
|-------|---|
| 久保 光彰 | 中学校数学科における全ての生徒の「参加」・「理解」・「習得・活用」を目指した授業づくりー自力解決と振り返りを重視してー |
| 高塚 夏海 | 古典を自分ごととして学ぶことのできる授業のありかた |
| 前田 凌玖 | 自律した学習者の育成を目指した授業づくりー自己調整学習の観点からー |
| 三上 紘輝 | 中学校の理科授業におけるジョンソンらの協同学習が生徒に及ぼす影響についてー自己効力感に焦点を当ててー |

1年次院生「中間報告会」研究テーマ

| ミドルリーダー養成コース | |
|------------------|--|
| 葛西 健介 | 教育内容・教材のレリバンスがある授業づくりに関する考察ー中学校英語の授業に着目してー |
| 工藤 愛美 | 子どもを「見取る」力の向上を通じた教師の「学び合い」コミュニティの構築に関する実践研究ー特別活動における協働的な学びを通してー |
| 櫻庭 レミ | キャリア・パスポートを活用した対話的な振り返り活動による自己形成への支援ー「自分事」として捉えるポートフォリオの工夫と実践ー |
| 佐々木洋子 | 心理的安全性の高い学級づくりーSELと授業改善の二本柱ー |
| 篠原 英樹 | 多様な話し合い活動を通じた学級における自治的集団の形成ーショートクラス会議を軸とした実践ー |
| 福田 正道 | 他校の高等部生徒との交流学习をとおした小・中学部児童生徒のキャリア教育の推進ー「思いの変化」や「内面の変化」に着目した交流についてー |
| 松浦 里美 | 特別支援学校における教員の事例的知識の外化と共有を通じた力量形成に関するー考察ールーブリックの作成・活用を通してー |
| 三國 里美 | 定時制高校における円滑な職業への移行を支援する体制づくり |
| 横濱 知愛 | 生徒の主体性を育む学校保健のマネジメントーミドルリーダーである養護教諭のアプローチとしてー |
| 学校教育実践・教科領域実践コース | |
| 遠藤 佳子 | 保健室来室時間診票を活用した生徒の自己理解の深化ー意識化と言語化に着目してー |
| 斎藤 広和 | 生徒の「話すこと(発表)」の質的向上を目指す授業実践ー「英語コミュニケーション」での主体的・対話的で深い学びの実現ー |
| 松田 怜紗 | 交流及び共同学習の充実に向けたー考察ー図画工作科における対話から見通しをたてる場面の創出ー |
| 村山 梨玖 | 自己効力感を高める教師の効果的な働きかけ |
| 渡辺 結衣 | 当事者意識を持たせられる外傷予防教育についてー頭部外傷の罹患性と重大性に着目してー |
| 有働 将之 | 高等学校数学科における全ての生徒の「参加」・「理解」・「習得・活用」を目指した授業づくりー焦点化に着目してー |
| 小山内緋流 | 高等学校国語科における文学の解釈を深めるための授業づくり |
| 相馬龍乃介 | 高等学校倫理(公共)における対話を通して思考力を育成する授業開発 |
| 武田 遼 | 生徒が歴史を現在と関連させて捉えることができる歴史授業づくりについて |
| 羽場 匠洋 | 中学校数学科における「学び合い活動」を通じた生徒の苦手意識の克服に向けてー相互評価を取り入れた授業実践ー |
| 福岡 寛文 | 中学校理科授業における学習行動の影響についてー授業UDと興味に注目してー |

私の大学院生活—2年間で得たもの・学んだこと—

ミドルリーダー養成コース

浅利 美穂（青森市立浪館小学校）



大学院での2年間は、自分の原点を振り返り、学ぶ楽しさを再発見する貴重な時間でした。年齢や校種、地域を越えた仲間との出会いは大きな支えとなり、院

生室で「当たり前」を問い直し、対話を重ね励まし合った経験は、今も私の原動力です。研究ではPBSに着目し、叱責が続くマイナスのサイクルから子どものできている行動を認めるプラスのサイクルへの転換を試みました。「子どもを変えるのではなく、自分の見方を変える」ことの重要性を学んだことは、教師としての大きな成長につながりました。これまでの学びと仲間との絆、支えて下さった方々への感謝を胸に、これからも教師と子どもが共に笑顔で成長できる学校づくりに取り組んでいきます。

遠藤 彩華（八戸市立城北小学校）



教職大学院での2年間は、学校・家庭・地域が、ともに児童を支える仕組みを考え、勤務校での実践と大学院での理論的学びを往還する日々

でした。実践を理論で検証し、理論を実践に生かす過程を通じて、地域資源の活用や協働の意義を深く理解できました。そして、支え合いながら学びを深めた仲間との時間も大きな財産です。最終報告会では、地域とつながる活動を通じて明らかになったことを報告し、今後の教育活動にどう生かすのかを示したいと思います。最後に、支えてくださった先生方、そして温かく協力して下さった地域の皆様に心より感謝申し上げます。

高坂 洋輔（青森県立青森第二高等養護学校）

この2年間は、私にとって「理論と実践の往還」を体現するプロセスでした。教員としてだけでなく、保護者、野球指導者、そして大学院生という多角的な視点を往来することで、仕事を含めた日



常と大学院での学びが深く結びつきました。

また、ともに学んだ仲間たち、ご指導いただいた教職大学院の先生方との繋がりも大きく、さまざまな刺激を受け、心揺さぶられ、自分自身のこれまでを客観的に見つめ直す機会となりました。大学院修了後も「繋がり」を大事にし、学び続ける姿勢を維持し、特別な支援を必要とする子どもたちだけでなく、青森県のすべての子どもたちのために歩み続けていきたいと思えます。2年間、本当にありがとうございました。

三戸 大志（田舎館村立田舎館中学校）



教職大学院での2年間は、自らの固定的な教育観を刷新し、物事が「別様であり得る」可能性に触れる貴重な時間でした。研究テーマに「生成AIの教育利用」を掲げましたが、研究を通して痛感したのは、教育の諸課題はAIに聞けば答えが出るほど単純ではないということです。理論を深めるほどに、最前線で子どもたちと向き合い、最適解を模索する先生方の実践知の尊さを再確認しています。

今後は、大学院で得た視座を礎に、謙虚に学び続けていきたいと考えています。最後になりますが、研究にご協力いただいた勤務校の先生方、ならびにご指導くださった教職大学院の先生方に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

長嶺 海（青森県立青森西高等学校）



教職大学院での学びは、私のものの見方や考え方を大きく変えるものでした。授業や実習で得た学びに加え、共に学んだ仲間

の存在は非常に大きなものでした。校種や年代の異なる同級生から刺激を受けた日々は、まさに「我以外皆我師」であり、そこで得た知見は、生徒と関わる日常の実践

に生かされていると実感しています。また、「見取り」を学んだことも私の実践を支える重要な土台となりました。困難を含めて学ぶことの意義と楽しさを改めて実感し、常に支えご指導くださった先生方のもとで学んだ2年間は、かけがえのない時間でした。今後も学び続ける教員でありたいと強く思います。結びに、実践に際し多大なるご理解とご協力を頂いた勤務校の先生方、生徒の皆さんに深く感謝申し上げます。

細田 瑛介（青森県立五所川原高等学校）



教職大学院での講義や実習、仲間との対話を通じて多くのことを学び、私自身の「教師としてのあり方」を見つめ直すことができました。その結果、現場に戻った現在は、生徒一人

ひとりと丁寧に向き合い、生徒が社会を生き抜くために必要な力について、これまで以上に深く考えるようになりました。その思いを基に実践研究に取り組むとともに、ホームルーム経営や授業においても新たな工夫を取り入れ、試行錯誤を重ねています。今後も学び続ける姿勢を大切にしながら、学校課題の解決や生徒の成長に貢献できるよう、自身の実践を磨いていきます。最後に、2年間の学びを支えてくださった教職大学院の先生方、勤務校の先生方に対し、心より感謝申し上げます。

山内 千秋（鶴田町立鶴田小学校）



教職大学院での2年間は、これまでの実践を一度立ち止まって見つめ直し、自身の教育観を問い続ける日々でした。多様な視点に触れ、対話を重ね

た経験は、自分一人では得ることのできない学びであり、「何を大切にしたいのか」を言葉にして捉え直す力につながったと感じています。また、理論を学ぶことで実践の意味付けや価値付けが深まり、理論と実践を往還する学びを体感することができました。「教師の学びと子どもの学びは相似形」という言葉にあるように、今後も学び続ける教師であり続けるとともに、この学びを青森県の子どもたちに還元していけるよう努めてまいります。進学の中を押し進んでくださった校長先生をはじめ、長期の学びを理解し支えてくださった勤務校の先生方、親身にご指導くださった教職大

学院の先生方、そしてかけがえのない仲間たちに心より感謝申し上げます。

横濱 和也（六ヶ所村立千歳平小学校）



最終報告会では2年間の集大成として、自律的・継続的な校内研究の構築に向けた実践を報告します。「事実解

釈型」の研究手法や指導案の精選、子供の姿を語り合う協議会の推進など、本校の先生方と共に歩んだ軌跡から見えた成果をお伝えします。

教育の諸課題について先生方や院生と議論を重ねた日々は、私にとって何物にも代えがたい財産となりました。また、ここでしか出会えなかった仲間たちと、濃密な時間を過ごせたことは私にとって幸運なことでした。この学びと出会いを通じ、自身の課題や今後注力したい道が明確になりました。教職大学院での経験を糧に、今後も子供たちの成長に誠実に向き合い、一歩ずつ歩みを進めていきたいと思っています。

学校教育実践・教科領域実践コース

加藤 広之（学校教育実践コース）



商業の楽しさ、おもしろさを感じることができた2年間でした。そう思えるのは、実習先の指導教員の先生方からのアドバイスや生徒から多くのことを学

び、新たなことへ挑戦し続けたからだと思います。また、教職大学院の授業やゼミ活動を通して理論を学んだことが土台となっていたからだと思います。2年間で一番大切にしたいことは「子どもを中心に考える」ことです。春からもこの気持ちを忘れずに大切にしたいと思っています。最後になりますが、これまで実践研究に御協力くださった実習校の先生方、御指導くださった教職大学院の先生方に対し、心から感謝申し上げます。

熊谷 翼（学校教育実践コース）



入学前に築いてきた縁や経験が各所で活かされるとともに、新たな縁や経験を数多く積み重ねることができた2年間だったと感じています。講義や実習、試

験、そして余暇に至るまで、喜怒哀楽をその時々で素直に表出し、体感できたことは、教職大学院への入学によって初めて得られた、私にとっての大きな財産です。それもひとえに、実習校の生徒や先生方、教職大学院の先生方や院生の方々が、熱心に向き合い、温かく支えてくださったからこそであり、心より感謝申し上げます。これまで携わってくださった方々、そしてこれから出会う方々との縁や経験を大切にしながら、しなやかに人間味あふれる一人の人間を目指し、今後も邁進していきます。

佐藤 希泉（学校教育実践コース）



実習校の子どもたちの様子、そしてこの2年間の経験から学ぶ目的と振り返りの重要性を噛みしめています。子どもの気になる言動は氷山の一角にすぎないことを、これまで学んできました。授業実践では、子どもたちに学ぶ意識や意欲があっても、見通しをもてないことで困らせてしまう場面もありました。そのような中でも、その子の目に見える優しさなどを含め、本人の努力はもちろん、背景にいる友だちや保護者、先生の影響を目の当たりにしました。すると、その子の現在だけでなく、過去や未来に視点が行き来し、様々な方々のおかげで児童理解が深まっていくことにわくわくしています。このような明日への活力となる振り返る習慣づくりは教職大学院での日々の宝物です。

機会を多く得ることができました。特に、生徒の学びをどのように支え、主体性を引き出すかという視点については、これまでの学びを通して大きく成長することができたと感じています。本学で学んだことを、これから出会う生徒一人一人の学びに還元し、主体的に考え、学び続ける力を育む授業づくりに生かしていきたいと考えています。

佐藤 恒太（学校教育実践コース）



教職大学院での2年間は、毎日が充実したものでした。講義や教育実習、学校現場での観察を通じて、理論と実践を往還しながら教育について深く考える

機会を多く得ることができました。特に、生徒の学びをどのように支え、主体性を引き出すかという視点については、これまでの学びを通して大きく成長することができたと感じています。

本学で学んだことを、これから出会う生徒一人一人の学びに還元し、主体的に考え、学び続ける力を育む授業づくりに生かしていきたいと考えています。

佐藤 譲（学校教育実践コース）



教職大学院で過ごした2年間は、私にとって学びと成長の連続でした。自身の勉強不足や教職への不安を抱えて入学しましたが、講義で得た幅広い知識を実習における授業実践に結び付け、試行錯誤を重ねる中で、「考え続ける姿勢」を身に付けることができたと感じています。修了を目前に控え、ここでの学びが確かな自信につながっていることを実感しています。

教育実践研究発表会では、温かく迎え丁寧にご指導くださった実習校の先生方や、悩みに寄り添い親身にご指導くださった大学院の先生方への感謝の思いを胸に、悔いのない発表に臨みます。今後はこれまでの経験を糧に、子ども一人一人と誠実に向き合い、学び続ける教師でありたいと考えています。

八木橋 奈緒（学校教育実践コース）



教職大学院での2年間は、理論と実践を往還しながら、子ども一人ひとりに向き合う姿勢を問いつける時間でした。実習や授業、省察を通して、理論を実

践に生かす力や、指導の意図や成果、課題を整理して捉える力を身につけることができました。また、多様な児童を支援する視点や、学び続ける教師としての在り方を学べたことは大きな財産です。最終報告会では、これまでの学びと課題を整理し、今後の実践につながる発表ができるよう臨みたいと考えています。ご指導くださった大学院の教職員の皆様、ご協力くださった実習先の先生方、児童の皆様に心より感謝申し上げます。

山上 昭恩（学校教育実践コース）



2年間は振り返ると、日々試行錯誤しながら理論と実践を往還する中で、入学当初よりも多角的かつ長期的な視点で教育と向き

合えるようになってきたと感じています。実習では、子どもの幸せが自らの喜びにつながり、人を

喜ばせることが自身のやりがいであることを改めて実感しました。実践研究では、学部時代の卒業論文を土台に理論を再構築し、子どもの実態に合わせて音楽の療法的効果を活かした実践に取り組むことができました。このような歩みができたのは、多くの方々の支えがあったからです。今後は、子どもたちが安心して過ごせる時間や環境づくりを大切に、感謝と喜び、学び続ける姿勢をもって、子どもとともに成長する教員を目指していきます。

山谷 峻右 (学校教育実践コース)



教職大学院での2年間は、実践を通して自分の見方と関わり方を省察し続ける時間でした。実践研究では、生徒の反応やつまづきを手がかりに

授業を捉え直し、問いの立て方や教師の関わりを再構成してきました。こうした実践を振り返る中で、できごとをそのまま受け取るのではなく、意味を考えながら言葉にする姿勢が身に付いたと感じています。その結果、数値データと記述を往還しながら学習の過程を捉える視点も養われました。この姿勢は私生活で人や社会を問い直してきた経験とも重なっています。4月からは中学校教員として、授業や日常の関わりの中で子どもと向き合い、成長を支える実践を着実に積み重ねていきたいと考えています。

久保 光彰 (教科領域実践コース)



講義で、学習指導や生徒指導等について校種や教科の壁を超えて話し合ったことが思い出です。また、講義で貧困等のこどもを取り巻く環

境の諸問題を学んだこと、実習での生徒の実態から、「当たり前」を問い直していくことの大切さを感じました。

実習では年間を通して生徒と関わるため、「生徒との人間関係の上に指導が成立する」と言われるように、休み時間の関わりや生徒と一緒に文化祭等の学校行事に取り組むことにより、生徒との人間関係を築いていく必要性を実感しました。さらに、生徒が考える数学科の授業のためには、日常生活に関連した学習課題の設定、既習事項を確認するための仕組み、学習の振返りが大切であると気づきました。

高塚 夏海 (教科領域実践コース)



教職大学院での2年間は、実習校の先生方や仲間に支えられ、挑戦し続けた日々でした。特に ICT の活用や古典での探究的な授業の実

践は、教員として挑戦し続ける姿勢を確立するための大きな一歩となりました。現場の先生方の熟達した指導を前に、己の未熟さに愕然とすることもありましたが、その差を真摯に受け止め、試行錯誤する中で「折れずに向き合うガッツ」が身についたと実感しています。支えてくださった方々への感謝を胸に、教職大学院で培った挑戦の姿勢を、今度は現場の子どもたちの成長へ繋げていきます。

前田 凌玖 (教科領域実践コース)



教職大学院での2年間は、中学校外国語(英語)における自己調整学習を軸に、研究と実践を重ねてきました。実習では、生徒の実態に即した目標

設定や振り返りの支援が、英語学習への意欲を高めることを実感しました。また、その中で、「生徒は教師が想像した姿以上に成長する力を持っている」という学びを得ました。日々の小さな声かけや支援の積み重ねが、生徒の変化につながることを実感した経験は、私の教育観の基盤となっています。

最終報告会では、これまでの学びを整理し、生徒一人一人の目標に向き合いながら取り組んできた実践の軌跡を報告します。

三上 紘輝 (教科領域実践コース)



教職大学院での2年間は、授業や実習、日誌の振り返りを通して、教員としての土台を見つめ直す時間でした。特に、生徒が安心して過ごせる雰囲気や人間関係づく

りが、学びの出発点になることを強く実感しました。また、授業では「この時間で何を大切にするか」を考え、見通しをもって構成することの重要性を学びました。試行錯誤を重ねながら、学び続ける姿勢そのものが教員としての力になると感じています。

ミドルリーダー養成コース

葛西 健介（深浦町立深浦中学校）



「理論と実践の往還」を胸に、現場経験を振り返りながら新たな価値観を獲得していく毎日です。当初は、勤務校の教育目標「夢を持ち、共に学び高め合う生徒」

の実現のために、何が正解かと模索する意識を持っていました。しかし大学院での学びを経て、『正解はどこにも転がっていないのでは？』『探すより「最適解」を生み出していく自分になっていこう』という成長志向を持てるようになりました。成長志向とともに前向きに実践を重ねる教員でいることで、子どもたちにも良きロールモデルとして「主体的に学ぶ」姿を示すことができるはずです。子どもたちが自身の生き方を見つめることができる授業を目指し、今後の研究に邁進します。

工藤 愛美（弘前大学教育学部附属小学校）



振り返ると、本当にあっという間の1年間でした。教職大学院での学びは、教室を離れ、学校現場や行政の取り組みを新しい視点で知る貴重な時間でした。特に、多様な校種や教科を専門とする院

生仲間との出会いは、私にとって大きな財産です。異なる経験や考え方に触れることで、自身の視野が広がり、学びを深めることができました。また、これまでの教職経験で「何となく感じていたこと」を問い直し、理論として学べたことで、授業づくりや教師としての在り方を見つめ直すきっかけになりました。来年度は勤務校に戻り、ここで得た学びを生かして「理論と実践の往還」を体現していきたいと思っています。

櫻庭 レミ（弘前市立東目屋中学校）



大学院での1年は、自分自身を客観的に見つめ直す得難い時間となりました。これまでの「当たり前」を問い直し、教育の目的に立ち返って深く考える経

験は、何よりの学びでした。一学生として学ぶ中で、変化の激しい社会を生きる子どもたちに必要な力と、教師が果たすべき役割の輪郭が改めて見えてきたように感じています。また、多様な現職院生との協働を通じ、個を超えた「チームとしての学校組織」の重要性と現場の可能性も実感しました。このような貴重な学びの機会を与えてくださった方々への感謝を胸に、春からは研究してきたキャリア教育の実践はもちろん、同僚と協働し学校全体を高める存在となれるよう努めて参ります。

佐々木 洋子（南部町立名川小学校）



振り返れば、教職大学院での学びの日々はあっという間でした。私の中での大きな変化は、子どもを見取る目だと感じています。表面的な行動を見るのではなく、その行動の背景を読み解き、寄り添った指導や支援の重要性を改めて実感しました。さらに、子どもの貧困や協働的な生徒指導、教育相談、教育法規について学び、学校だけでなく行政や福祉と連携する視点を得ました。実践研究では心理的安全性を踏まえ、子どもが安心して意見を言い合える学級づくりに取り組みます。大学院で過ごせる日々は残り僅かですが、学びを力に変え、子どもたちを支える実践につなげていきたいと思っています。

篠原 英樹（青森市立佃中学校）



教職大学院での講義や実習を通して、充実した日々を過ごしています。学びを深める中で得た新たな知見や多角的な視点を大切にしてい

いき、この学び続ける姿勢を今後の教職人生での軸にしていきたいと考えています。

学級は社会に出るために必要な能力を養う場であり、生徒は自ら考え、発言し、活動するという経験を通して、大きく成長します。また、学級集団の中で協力し、学級や学校をよりよくしていこうと課題解決していくことが現代を生き抜く力となると考えています。

次年度の教育実践研究では、「話し合い活動」に着目し、「仲間とともに目標決定・実践・振り返る」というサイクルを通して、生徒の可能性を最大限に広げていきたいと考えています。

福田 正道（青森県立八戸第二養護学校）



教職大学院入学以来、理論と実践の往還を通して教育の多様性を学ぶことができました。特に、校種や年代の異なる仲間との対話は、自身の実践を相対化して捉えることができました。実習では各現場の課題を肌で感じ、組織的対応の重要性を再確認することができました。研究テーマである「異学年・異学部交流を通じたキャリア教育」については、教員の負担感に配慮した持続可能な推進方策の構築を目指しています。学部間の壁を越えた連携が、児童生徒の社会性の向上にどう寄与するかを明らかにしたいと思います。今後は研究成果を自校に還元し、組織的な支援体制を構築することで、子ども一人一人の豊かなキャリア形成に寄与する実践を積み重ねていきたいと考えています。

松浦 里美（青森第一養護学校）



教職大学院での学びは、これまで当たり前と考えていた自身の教育観がことごとく崩されるような、衝撃と発見の連続でした。理論に触れ、実践を客観視することで、自分にできることや、なすべきことがより具体的に見えてきたと感じています。日々の講義はもちろんですが、学外の様々な場所に赴き、肌で感じた空気感や新たな出会いは、私にとってかけがえのない財産となりました。このつながりを大切にしながら、大学院での学びを現場へと繋げられるよう、残りの期間も精いっぱい取り組んでいきたいと考えています。

三國 里美（青森県立北斗高等学校）



大学院に進学してもうすぐ1年が経ちます。初めは膨大な知識や情報を取り込むだけで精いっぱい、他校種の先生方との協議では、いかに自分が無知であるかを痛感しました。しかし、その気づきが学ぶ意欲をさらに高めてくれました。研究授業や研修企画を仲間と共に作り上げる過程では、協働することの楽しさと、学びに「仲間がいる」ことの心強さを深く感じました。

大学院では「生徒の学びと教員の学びは相似形」というフレーズがよく聞かれます。これからも学び続ける教員でありたい、そして常に自分をアップデートし続けたい。4月からは、この1年間の

学びを生かし、生徒や学校に還元できるよう実践を重ねていきます。

横濱 知愛（東北町立東北中学校）



『4月のニュースレターでは何を書いたっけ…』と見返してみると、【保健室を一步出た実践に興味があり、学校運営や開かれた学校作りに積極的に関与して、子供たちの健康の保持増進に繋がりたい】と述べていました。実践研究テーマは今もブレることなく「マネジメント」ですが、教職大学院で“同僚の声にしっかりと耳を傾ける”ことが何よりも大切であることに気づきました。独り善がりではなく学校全体を視野に入れ、生徒も教師もワクワクできる“プロアクティブな養護実践”について学びを深め、研究に繋がってきたいです。

学校教育実践・教科領域実践コース

遠藤 佳子（学校教育実践コース）



教職大学院に入学し、さまざまな学びを深めていく中で、出会いそれ自体の価値を実感することが増えました。ミドル院生はもちろん、ストマス院生同士であっても、それぞれが異なる経験を通して培ってきた視点や見方を共有できる講義や省察の時間そのものが非常に貴重であり、尊い時間であったと、この1年を振り返っています。来年は実習や研究が中心となり、今年度に比べて個々の動きが増えるかもしれませんが、仲間と語り合い、それぞれの思いを言葉にする時間も大切にしていきたいと考えています。

斎藤 広和（学校教育実践コース）



授業や教育実習を通して、「生徒は何のために授業を受けるのか」（或いは「私は何のためにこの授業をするのか」・「(生徒の50分を使い、あえて)この授業をする目的は何か」)を改めて考えるようになりました。既に制度化された学校教育において、この問いは遠回りで無意味に思えるかもしれませんが、未熟者の私は、この問いによって地域、学校、クラスごとに異なる生徒に関して、彼らが授業に求めることは何か、逆に彼らが学校から求

められている生徒像は何かを考察することで、生徒理解の目を養いたいと思います。今後も教えることの難しさを噛みしめながら、生徒にとって少しでも意味のある教育ができるよう学修と研究を進めてまいります。

松田 怜紗（学校教育実践コース）



私は現在、図画工作科を通して研究を進めています。学部時代とは違い、授業内にどのような仕掛けを作るか、それによってどのような反応が予想されるかなど、

1つの授業にたくさん考えるポイントがあり、改めて教員の面白さと大変さを感じました。たくさん考えた分、児童はしっかり反応を返してくれるため、これからも楽しさを生み出せる授業づくりができるよう、日々精進します。

1年間教職大学院で学んできましたが、特に成長したことは学内で道に迷わなくなったことです。今では、行きたいところに一人で行けるようになりました。大きな進歩です。来年度はさらに開拓できるように頑張ります。

村山 梨玖（学校教育実践コース）



立ち止まる暇もないほど走り続けた1年間だったと思います。日々何かに追われている毎日でしたが、その中でも自分の教育観やスキルはより明確に、より強くなっていった実感があります。た

くさんの視点や考え方をくれたミドルの方や強い信念を持っている同期のおかげもあり、充実した日々を過ごしています。

これから、お世話になっている実習先の児童のために自己効力感の研究をより深めていきます。これからの日本を担う子どもが、未来を明るいものであると思えるように、そして自分の教育の軸となるように研究を加速させていきます。

渡辺 結衣（学校教育実践コース）



教職大学院に入学してから、大学時代に学んできた内容について、学校現場とのつながりを改めて考えるようになりました。講義や実習を通して、学校現場には多様な課題があり、その中で支援が行われていることを実感しています。だからこそ大学院では、現場の状況を踏まえた実現可能な実

践を進めてまいります。

践を考えていく必要があると感じています。実践研究を進めるにあたっては、現場でも無理なく取り組めるかという視点や、他の先生方と課題を共有することを大切にしながら、学びを深めていきたいと思っています。

有働 将之（教科領域実践コース）



同年代の中でも、教員になっている人たちに比べて授業の経験が少ない私たち院生が教壇に立った際、彼らと同等以上のパフォーマンスを発揮するためには、「大学院での学び

を実習の場で実践し、その経験を省察するプロセスを大切にしなければならない」と入学以来考えてきました。現在は、実習での省察を基に「高等学校数学科におけるユニバーサルデザインに基づく授業づくり」の研究に注力しています。来年度は今年度の取り組みを土台として、数列の単元を通じた実践から生徒の成長に貢献できるように邁進してまいります。

小山内 緋流（教科領域実践コース）



教職大学院での日々は、自分自身の教育観を多角的に見直す時間になっていると感じています。この1年、大学院での講義を通じて、生徒指導や教育相談、教科

教育（国語）など、学部だけでは考えきれなかった諸課題を、数多く考察できたことが印象に残っています。また、実習においては、授業実践や、その他教育活動を通じて、自分自身の課題点を客観的に把握する契機ともなりました。

今後は、1年目での反省点を踏まえ、文学教育のありかたに対する見識をよりいっそう深めていきたいと考えています。そして、大学院や実習校の先生方への感謝を忘れずに、次年度も大学院での活動にのぞんでいきます。

相馬 龍乃介（教科領域実践コース）



5月に発行された第25号では、学問に対する知見の浅さや実践に関する不安要素の存在から進学したことを記述しました。そこから大学院での授業や長期に渡る実習を経て、当時よりは読書を重ねて知識を身に付け、実践を通してできることが増えたかと思

います。しかし、何かをできるようになるとまた

新たな課題に直面し、自分がいかに無知で絶望の谷から抜け出せないかということの思い知らされます。(これは厭世的・悲観的なのではなく、自分ができるようになった事実も認識していることを言及しておきます)

恐らく私の学びにはゴールがありません。ですから、常に自分のベストを更新するというマインドで、残りの1年間を楽しみたいと思います。

武田 遼 (教科領域実践コース)



私は教職大学院に入学して、たった1年で多くのことを学び、自己が変容したと振り返っています。様々な理論について学び、実践から学んできました。その学びが楽しいものだと感じつつもやはり苦しい面も少なくなかったと感じています。しかし、学べば学ぶほど、知れば知るほど世界の見え方が変わっていく感覚は何者にも変え難くワクワクするもので、環境に恵まれているということもあり充実した生活を送ることができていますと感じています。これからも、結果がどうなるかわかりませんが、自分にできる精一杯のことを積み重ねていこうという意識で教職大学院生活を送っていきたいと思います。

羽場 匠洋 (教科領域実践コース)

教職大学院での授業やフィールド実習を通して、理論と実践を往還し続けた1年でした。北海



道教育大学函館校からの進学で、環境の違いに当初は不安もありましたが、多くの学びに支えられ乗り越えることができました。実習では、生徒の「数学への苦手意識」

に着目しました。「学び合い活動」において、生徒同士が答えではなくヒントを出し合い、納得して学習を進める姿に、授業者の説明以上の可能性を感じたからです。この手応えを確かなものにするため、来年度も「相互評価」の仕組みを取り入れさらに発展させてまいります。互いの考えを認め合うことで自己有用感を高め、苦手意識を「できた」という自信へ変えていく授業実践を深めてまいります。

福岡 寛丈 (教科領域実践コース)



教職大学院に進学してから再現性を求めすぎないように変化しています。実践の対象となる生徒が毎回違うこと、環境が違うことで同じ方法で行っても結果が違ってくるから

です。これからの実践研究では生徒の特徴を理解して進めていくようにしていきたいと思えます。考察する際には地域の特徴を踏まえたくえで考察していきたいと思えます。研究を通して自分が授業を楽しめるような授業改善をしていき、生徒も楽しめる授業をしていきたいと思えます。

院生の活躍

院生が高校の校内研修を運営—生徒指導のありかたを考える—

「いじめ・自殺に関する職員研修を」という学校からの要望に応え、「協働的生徒指導のマネジメント」を履修するミドルコースの院生7名が、1月7日、津軽地方の高校を訪問し、対話型のワークショップを行いました。ふりかえりの時間では、「どうしたの?という言葉を大事にしたい」「自分だけで抱え込まずに、チーム学校で対応したい」「自分が思いつかないようなことをグループの人から聞くことができた」等の声が聞かれました。



手作りの役割カード



授業でアイデアを練る

<編集・発行>

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻
(教職大学院)

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地

Te1 0172-36-2111(代表)

メールアドレス k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp



NITS弘前大学センター 公開セミナー

最新の教育課題を幅広く扱い、専門の方々からお話を伺います。

すべてオンライン開催で、県外の方も参加可能です。

(第4回のみ、弘前大学教育学部2階大教室にて、対面・オンラインのハイフレックス開催となります。)

同一日に2つの回を設定しました。

申込フォームからご参加登録していただくことで好きな回に参加できます。

第1回 2026年 2月 7日 (土) **オンラインのみ**
13:00~14:40

生成AIと創る、これからの授業デザイン
~Gemini・NotebookLMで実現する学びの深化~

講師：井上 嘉名芽 氏(東奥義塾高等学校)

生成AI(Gemini・NotebookLM)を活用した授業デザインの可能性を、実践的なハンズオンで体験します。教材作成や校務の効率化により生まれた時間を、児童生徒一人ひとりの思考を深め、探究を支援する豊かな学びの創出に還元します。教育に携わる皆さまが日々の実践に即座に取り入れられる、生成AIを「教師の相棒」として活かし、子どもたちの学びを深化させる方法を一緒に考えましょう。

第2回 2026年 2月 7日 (土) **オンラインのみ**
15:00~16:40

政治をいかに教えるか
~知識と行動をつなぐ主権者教育~

講師：蒔田 純 氏(弘前大学)

18歳への選挙権年齢引き下げ以降、子供・若者に政治との関わり方を教える「主権者教育」が浸透しつつあります。しかし、若者の政治離れ、政治的無関心は改善の兆しを見せず、投票率は未だ低水準のままです。政治という、不可欠ですがセンシティブでもある問題をどのように教え、子供・若者の政治的意識をどのように高めていくか。この難しい課題について、国内外の事例や政治を取り巻く諸要素を踏まえながら、考えていきましょう。

第3回 2026年 2月 14日 (土) **オンラインのみ**
13:00~14:40

いま、高校入試を考え、議論するための視点

講師：次橋 秀樹 氏(京都芸術大学)

日本の高校入試が大学入試ほどの大きな議論を呼びにくいことの一因は、調査書や学力検査の扱い方の相違に見られるような、地域や学校がもつ多様性にあると考えています。しかし、いま、社会や学校教育の変化のなかで、高校入試についても地域を超えた議論が求められているのではないのでしょうか。そこで、現状をしっかりとふまえつつ、資質・能力の3つの柱の評価のあり方や大学入試との関係性など、高校入試を広く冷静に考え、議論するための視点をお伝えできたらと思っています。

第4回 2026年 2月 14日 (土) **対面
オンライン併用**
15:00~16:40

教育改革の中での授業の改善

講師：中野 博之 氏(弘前大学)

授業の方法は、目的・目標、そして、参加している子どもの実態に応じて臨機応変に変えていくことが大切です。教師の深い教材への理解を基盤にして子どもが教科として価値のある活動に取り組めるようにしていくためには、教師は常に子どもの事実を収集して主体的に次の授業に向けて創意工夫をしていく必要があります。このような授業改善に向けた教師の主体的な姿が、子どもたちの主体的な学びをつくり出していくと確信しています。

申込方法 申込フォーム(右)よりご参加登録をお願いいたします。

申込期限 第1回・第2回：2026年2月2日(月) ※100名に達し次第締め切ります
第3回・第4回：2026年2月9日(月) ※100名に達し次第締め切ります

お問い合わせ先 NITS弘前大学センター事務局 古川

Tel : 0172-39-3333

Email : nits-hirosaki@hirosaki-u.ac.jp



こちらから

お申し込みは